

常磐自動車道遺跡調査報告65

おひやうえのほら
大谷上ノ原遺跡（4次調査）

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～宮城県山元間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成22年度に行った楡葉町の大谷上ノ原遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。この報告書が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料となり、さらには生涯学習等の資料として広く県民の皆様に御活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、楡葉町教育委員会、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成22年11月

福島県教育委員会

教育長 遠藤 俊博

あいさつ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査業務を行っております。

常磐自動車道建設にかかる埋蔵文化財の調査は、平成6年度のいわき市四倉町に所在する遺跡の調査から開始され、富岡ⅠCまでの間については、榊葉パーキングエリアの一部を除き、平成13年度までに発掘調査が終了しております。平成14年度からは、富岡ⅠCから相馬ⅠC予定地までの区間にかかる遺跡の調査も開始され、平成21年度には新地ⅠC以北についての調査が着手され、現在も継続して実施されております。

本報告書は、平成22年度に発掘調査を実施した榊葉町の大谷上ノ原遺跡の成果をまとめたものです。本遺跡は榊葉パーキングエリア建設予定地にあり、以前に3回の調査が実施されたため、今回が4次調査になります。過去の調査では、旧石器時代の石器や、縄文時代と平安時代の集落跡などが確認されました。今次調査でも、福島県下でも貴重な旧石器時代の石器などが確認され、過去の調査成果を追認することができました。

今後、これらの調査成果を歴史研究の基礎資料として、さらには地域社会を理解する資料として、生涯学習の場等で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社、榊葉町ならびに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当事業団の事業の推進につきて、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成22年11月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 富田 孝志

緒 言

- 1 本書は、平成22年度に実施した常磐自動車道(いわき工区)遺跡調査の発掘調査報告である。
- 2 本書には、双葉郡楯葉町に所在する大谷上ノ原遺跡(4次調査)の調査成果を取録した。
大谷上ノ原遺跡 福島県双葉郡楯葉町大谷字上ノ原・山根 埋蔵文化財番号:54200089
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託により実施し、調査・報告にかかる費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の次の職員を配し調査にあたった。
文化財主査 大波 紀子
他に、同所属の吉田 秀享、佐藤 啓、西澤 正和が参加した。
- 6 本書の執筆にあたっては、調査を担当した調査員が行い、文責は文末に示した。
- 7 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関からご指導・ご助言をいただいた。
楯葉町歴史資料館
楯葉町教育委員会
東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所
- 9 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、巻末に掲載した。

用 例

1 本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 座 標 値 1・2・3次調査を踏襲して日本国土座標第Ⅸ系で設定した。
- (2) 方 位 図中の方位は真北を示す。表記がない場合は図の真上を真北とする。
- (3) 標 高 水準点を基にした海拔標高で示した。
- (4) 縮 尺 挿図中のスケール右脇に縮小率を示した。
- (5) ケ バ 遺構内の急傾斜の部分は III で、緩傾斜の部分は V で表現した。また、後世の擾乱の傾斜部は VI で表現した。
- (6) 土 層 基本土層はアルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせ、遺構内の堆積土はアルファベット小文字ℓと算用数字を組み合わせで表記した。
(例) 基本層位-L I・L II…、遺構内堆積土-ℓ 1・ℓ 2…
なお、挿図の土層注記で使用した土色名は、「新版標準土色帖22版」(小山正忠・竹原秀雄編著 1999 日本色研究事業株式会社発行)に基づく。
- (7) 網 か け 挿図中の網かけの用例は、同図中に表示した。

2 本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

- (1) 縮 尺 挿図中のスケール右脇に縮小率を示した。
- (2) 番 号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、写真図版中では「1-1」と示した。
- (3) 注 記 出土グリッド、出土層位などは遺物番号の右脇に示した。
- (4) 遺物計測値 計測値・石質は各実測図脇に示した。

3 本書で使用した略号は、次のとおりである。

楢葉町：NH 大谷上ノ原遺跡：OYUH グリッド：G
基本土層：L 遺構内堆積土：ℓ 土 坑：SK ビット：P

目 次

第1章	遺跡の環境と調査経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	地理的環境	3
第3節	周辺の遺跡と歴史的環境	5
第2章	遺跡の位置と調査経過	
第1節	位置と地形	10
第2節	調査経過	10
第3節	調査方法	11
第3章	遺構と遺物	
第1節	調査の概要と基本土層	15
	遺構と遺物の概要(15)	基本土層(15)
第2節	土 坑	17
	103号土坑(17)	104号土坑(19) 105号土坑(19)
	106号土坑(20)	107号土坑(21) 108号土坑(21)
第3節	出土遺物	22
	旧石器時代の石器(22)	縄文土器(24)
第4章	ま と め	25
	旧石器時代(25)	縄文時代(26) 平安時代(26)

挿図・表・写真目次

[挿図]

図1	常磐自動車道位置図	1	図7	基本土層	17
図2	周辺の地質・地形分類図	4	図8	103～105号土坑	18
図3	周辺の遺跡	7	図9	106～108号土坑	20
図4	調査区位置図	12	図10	104号土坑・遺構外出土の旧石器	23
図5	グリッド配置図	13	図11	遺構外出土土器	24
図6	4次調査区遺構配置図	16	図12	遺構配置図	27

[表]

表1	四倉IC以北常磐自動車道関連 市町村別発掘調査遺跡数	2	表2	周辺の遺跡一覧	8
----	-------------------------------	---	----	---------	---

[写真]

1	遺跡遠景	31	7	104号土坑	34
2	遺跡遠景	31	8	105号土坑	34
3	調査区全景	32	9	106号土坑	35
4	基本土層	32	10	その他の土坑	35
5	調査区南側	33	11	出土石器	36
6	調査区東側	33	12	出土土器	36

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯

事業概要と平成21年度までの事業経緯

常磐自動車道は、埼玉県三郷市の三郷インターチェンジ(以下ICと略す)を起点とし、千葉県から茨城県、そして福島県の浜通り地方を通して、宮城県亘理郡亘理町の亘理ICを終点とする高速自動車道である。このうち、三郷IC～いわき市のいわき中央ICまでは昭和63年3月に供用が開始され、平成11年3月にはいわき中央IC～いわき四倉ICまで、平成14年3月にはいわき四倉IC～広野ICまで、平成16年4月には広野IC～富岡ICまでの供用が開始されている。さらに、平成21年9月には、宮城県側の亘理IC～山元ICまでの11.5kmが開通し、残りは富岡IC～山元ICまでの47kmの区間となった。

これらの区間に所在する埋蔵文化財については、茨城県境からいわき中央ICまでの4遺跡を、昭和59・60年度に、いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して、発掘調査を実施した。また、いわき中央IC～いわき四倉IC間の埋蔵文化財に関しても、平成6年度から平成9年度にかけて、好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査を、いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託して実施した。これ以外の四倉町大野地区10遺跡の発掘調査は、福島県教育委員会が財団法人福島県文化センター(現 財団法人福島県文化振興事業団)に委託して実施した。

いわき四倉IC以北の路線内の埋蔵文化財については、平成9年度から福島県教育委員会が財団法人福島県文化センターに調査を委託して実施した。平成9年度以降の市町村別発掘調査数につい

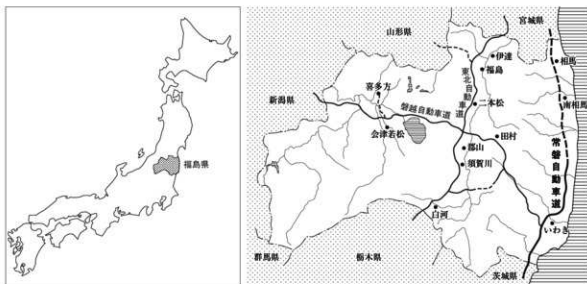


図1 常磐自動車道位置図

表1 四倉IC以北常磐自動車道関連市町村別発掘調査遺跡数

調査 年度	市 町 村 名												
	いわき市	広野町	楢葉町	富岡町	大熊町	双葉町	浪江町	南相馬市 小高区 原町区 鹿島区			相馬市	新地町	
H9	5	1											
H10	4	3	3	2									
H11		4	5										
H12		1	7	5									
H13			1	5									
H14				1	2								
H15							2					2	
H16					3				2			1	
H17					3	2	2	3	1	1	1		
H18					1		6	4	4	1	2		
H19							4	6	7				
H20			1				7	5	3		1		
H21					1			1	3	1	1	1	3

ては、表1に示した通りである。

なお、当初、富岡ICまでは、日本道路公団東北支社(現 東日本高速道路株式会社東北支社)いわき工事事務所、富岡IC以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、平成14年7月より富岡IC～浪江町までの区間についても、いわき工事事務所が管轄することとなり、相馬工事事務所は南相馬市～新地町までの区間となった。

平成22年度の調査経過

平成22年度の常磐自動車道(富岡～浪江)建設予定地に関わる遺跡発掘調査は、福島県教育委員会との委託契約に基づき福島県文化振興事業団遺跡調査部の職員1名を配置して実施した。調査対象遺跡は、楢葉町に所在する大谷上ノ原遺跡(4次調査)の1遺跡のみであり、調査面積は1,800㎡である。

ここは、常磐自動車道上り線楢葉パーキングエリアの建設が予定されているところであるが、調査区全域にわたって厚さ2mほどの盛土が覆っていたり、調査区内への進入路が工事側の10tダンプと錯綜したり、調査員詰め所や、作業員休憩所として使用するプレハブ等のヤードの確保が困難であるなど、調査前に多くの問題点が提示された。このため、前年度より東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所(以下、いわき工事事務所と略す)と数回の事前協議や現地打ち合わせを行い、調査前の条件整備として、調査区内の盛土の除去、発掘作業員の出勤時の時間制限、ヤード確保の問題点などが話し合われた。このうち、調査区内の盛土の除去については平成21年度

末までには終了し、作業員の通行安全は、作業時間をずらすことによって確保することとなった。

年度が明けた4月6日には、調査前の協議が行われ、調査期間中に榑葉町による土砂掘削運搬工事も行われる計画が知らされた。進入ゲートには交通誘導員を配置し、通行の安全を確保することとなったが、土砂運搬のために、10 t ダンプ15台程度が常時稼働する状況下で、通行せざるを得ないこととなった。ただ、その後、更なる安全確保から、文化財側の進入ゲートを新たに設置することとなり、工事側のダンプと、作業員などの通行が錯綜する事態は避けられた。

具体的な調査は4月上旬より開始されたが、工事側より調査区の部分引き渡しの順番が決められ、これに則っての調査となった。すなわち、調査区北西端部の工事用道路の隣接箇所が最優先で、次いで南西端部側、最後に東側および北西側の調査区の順番となった。

表土剥ぎが終了した4月中旬からは、作業員を導入し、調査区北西端部の最優先引渡し箇所から調査を開始した。4月23日には、最初の引き渡し箇所である調査区北西端部70mほどの範囲の調査が終了し、引き渡しを行った。

5月に入ると、遺構検出作業も順調に進み、縄文時代の落し穴や、平安時代の木炭焼成土坑などが検出され、逐次調査を行った。5月18日には、2番目の引き渡し箇所である調査区南西端部の500mほどの範囲の調査が終了したため、これの引き渡しを行った。また、旧石器時代の石器が数点出土したほか、縄文土器片も確認された。

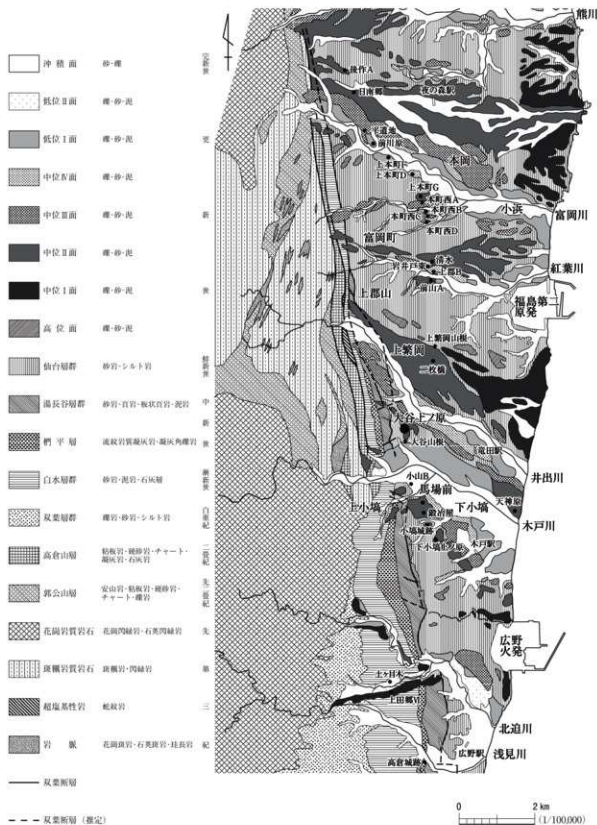
5月下旬には、検出した全ての遺構の調査が終了し、調査区内の地形測量や空中からの調査区全体の写真撮影を行い、5月28日に全ての調査が終了した。そして、5月31日には、県教育庁文化財課・いわき工事事務所・福島県文化振興事業団の3者立会いの下、調査区の引き渡しを行い、今年度のいわき工区内の発掘調査の全てが終了した。

その後、今年度調査した大谷上ノ原遺跡の整理作業を行い、福島県文化財調査報告書第478集『常磐自動車道遺跡調査報告65』として12月に報告書を刊行した。(吉田)

第2節 地理的環境

大谷上ノ原遺跡は、福島県双葉郡榑葉町に所在する。福島県は東北地方の南端に位置し、東方には太平洋が広がる。行政区分的には北関東地方や越後地方を含めた複数県と県境を接し、北は宮城県・山形県、西は新潟県、南は茨城県・栃木県・群馬県に囲まれている。福島県は全国的にみても総面積第3位という広大な県土を有し、県内は地理的な特徴から「浜通り地方」「中通り地方」「会津地方」と東西に3区分される。そのうち本遺跡の所在する浜通り地方は、阿武隈高地と太平洋沿岸域を包括する地域である。

双葉郡榑葉町は浜通り地方南部の太平洋沿岸の町である。町の総面積は104.2km²で、やや東西に長く、北は双葉郡富岡町、西は双葉郡川内村、南はいわき市・双葉郡広野町と接している。町全体の7割が山地となり、低地は海岸部周辺と付近の河川沿いに限定される。



(久保は0-1994・鈴木は0-1991・鈴木は0-1994をもとに作成)

図2 周辺の地質・地形分類図

榑葉町の地質構造は、浜通り低地帯の西縁を南北に走る双葉断層(岩沼-久ノ浜構造線)の東西で大きく異なっている。双葉断層の西側は阿武隈高地の主体部分となり、中生代白亜紀の花崗岩類が広く分布する。この花崗岩類には斑れい岩やアブライト・結晶片岩などが散在する。また、この双葉断層に沿って古生代から中世代の堆積物が帯状に発達している。古生代の地層は高倉山層・郭公山層が分布し、粘板岩・硬砂岩・チャートなどの堆積岩を含んでいる。中生代の地層としては、フタバズスキリュウなどの化石が発見される双葉層群が著名であるが、いわき市北部から榑葉町南端にかけて派生するもの大谷上ノ原遺跡の周辺には認められない。

他方、双葉断層の東側には、第三紀層の白水層群・湯長谷層群・仙台層群が帯状に分布する。それらは榑葉町周辺の丘陵部の基盤となっている。常磐炭田の採掘対象となった石炭層は中新世に形成された白水層群中にある石城層であり、その上位には中新世に形成された湯長谷層群が不整合に堆積する。その地層中には、石器石材として利用が認められる流紋岩やデイサイト質凝灰岩を含んでいる。また、鮮新世の仙台層群にも半固結のシルト岩・凝灰岩からなり、多くの火山灰層を介している。

浜通り地方の地形は、阿武隈高地から太平洋に注ぐ河川により浸食を受け、東西に長い丘陵が幾重にも連なっている。そのような丘陵部と低地部が交互に現れる地形を特徴とし、丘陵部には段丘面の形成も認められる。榑葉町内の地形も同様であり、井出川と木戸川が阿武隈高地から太平洋へ向かって東流し、それら河川と支流によって細長い丘陵地が形成されている。両河川の上流部は花崗岩を浸食した深いV字谷が形成され、下流部は幅の狭い沖積面と河岸段丘が発達している。段丘面は、標高の高いものから高位・中位Ⅰ・中位Ⅱ・中位Ⅲ・中位Ⅳ・低位Ⅰ・低位Ⅱと呼ばれる(久保ほか1994)。

町内には中位段丘が発達しており、その大部分は隆起扇状的な山麓河成平坦面を形成している。これらは、更新世後期の最終間氷期の海進・海退に伴って形成されたと推定される。大谷上ノ原遺跡が立地する榑葉台地は井出川と木戸川に挟まれ、中位Ⅱ段丘上の標高70～78mの範囲にわたっている。この中位Ⅱ面には、同町内に所在する天神原遺跡や小塙城跡など、本遺跡の他にも複数の遺跡から旧石器時代の遺物が出土している。

榑葉町の気候は、福島県内の中でも穏やかで、一般に夏に涼しく冬に暖かいといわれている。ただし、冬季はシベリア寒気団の季節風が阿武隈高地から吹き下ろし、猛烈な強風となって気象庁から強風注意報が度々発令されている。

第3節 周辺の遺跡と歴史的環境

榑葉町では、著名な天神原遺跡をはじめ、近年の常磐自動車道建設関連の遺跡など、発掘調査の成果が少なからずまとまってきている。それらの遺跡は、双葉断層西側の渓谷近くのほか、断層東側に広がる丘陵部および井出川や木戸川の浸食により形成された河岸段丘上、沖積平野部の自然堤

防上などに立地している。下記に、周辺遺跡について年代ごとに概観する。

町内で確認された旧石器時代の遺跡は、いずれも後期旧石器時代に属するものである。それらは上繁岡の塩貝遺跡、上小塙の中女平遺跡、下繁岡の原林遺跡、北田の天神原遺跡、波倉の北向遺跡、大谷上ノ原遺跡などが挙げられる。特に大谷上ノ原遺跡では、本遺跡の過年度調査で大小5カ所のブロックを検出し、後期旧石器時代の前半期と後半期の異なる時期の石器群が確認された。今回の調査でも、攪乱層からの出土ではあるものの当地域での新資料が出土している。

縄文時代の遺跡は町内の広範囲に分布しており、発掘調査は後・晩期の遺跡を中心に行われている。早期の遺跡からは、波倉の北向遺跡で押型文系土器、上小塙の鍛冶屋遺跡で沈線文系土器が出土している。本遺跡の一連の調査でも微量の沈線文系土器が出土している。前期の遺跡としては本遺跡のほか、前述した塩貝遺跡や下小塙の赤粉遺跡が挙げられる。中期の遺跡では、井出の代遺跡・井出上ノ原遺跡、上小塙の馬場前遺跡などで発掘調査が行われている。特に馬場前遺跡からは100軒を越える複式炬を伴う竪穴住居跡が検出され、当該期の中心的な集落であることが判明した。また、馬場前遺跡と井出上ノ原遺跡からは全国的にも希少なサメの歯形の異形石器が出土している。

後・晩期の遺跡としては、代遺跡・馬場前遺跡・鍛冶屋遺跡のほか、井出の山所布遺跡・西ノ内遺跡などが挙げられる。当該期の遺跡は、双葉断層西側の渓谷近くや下位段丘面に分布する傾向が認められる。そのうち鍛冶屋遺跡では後期前葉の住居跡や跡跡の変遷をたどれる集落跡が確認でき、馬場前遺跡からもわずかに同時期の住居跡を検出している。晩期の例としては山所布遺跡や西ノ内遺跡など、後半期に属する遺跡が多い。

これまでに確認された弥生時代の遺跡は前・中期のものが中心となり、段丘面のほか海岸近くや低位段丘にも分布する。前・中期の遺跡としては、山田岡の美森B遺跡から集落跡が確認され、山所布遺跡・西ノ内遺跡からは少量の土器片が出土している。それらに後続するものとしては北田の天神原遺跡をはじめ、下小塙の下小塙上ノ原遺跡・久保田遺跡、波倉の北向遺跡・大倉平遺跡、山田浜の崇神山遺跡などが挙げられる。特に天神原遺跡では多数の土坑墓と土器棺墓を検出しており、当該時期の集団墓であることが判明した。出土資料は天神原式の標識資料ともなり、国指定重要文化財の指定も受けている。しかし、それら以降の後期の遺跡については天王山式期の波倉の波鏡院遺跡が確認されるのみである。

古墳時代の遺跡は、現在のところ後期に属する横穴墓が造営されるまで確認できていない。町内の横穴墓は基盤層の凝灰岩を掘り込んでおり、遺存状態は良好である。波倉の北向横穴墓群、北田の下山横穴墓群、山田岡の名古谷横穴墓群・松ノ口横穴墓群などは発掘調査が行われている。また、墳丘をもつ古墳としては北田の船場古墳、前原の田中内古墳、山田岡の稲荷古墳が登録されている。集落跡の調査は行われていないが、土器の散布地は数箇所発見されている。

奈良・平安時代には、当地域は岩城郡に属していたと推定され、町内には多数の遺跡が認められる。それらは中位の段丘面に立地し、一部沖積低地にも分布している。発掘調査が行われた遺跡は、下繁岡の赤粉遺跡・植松遺跡、波倉の北向遺跡、山田岡の古駅遺跡、下小塙の下小塙上ノ原遺跡、

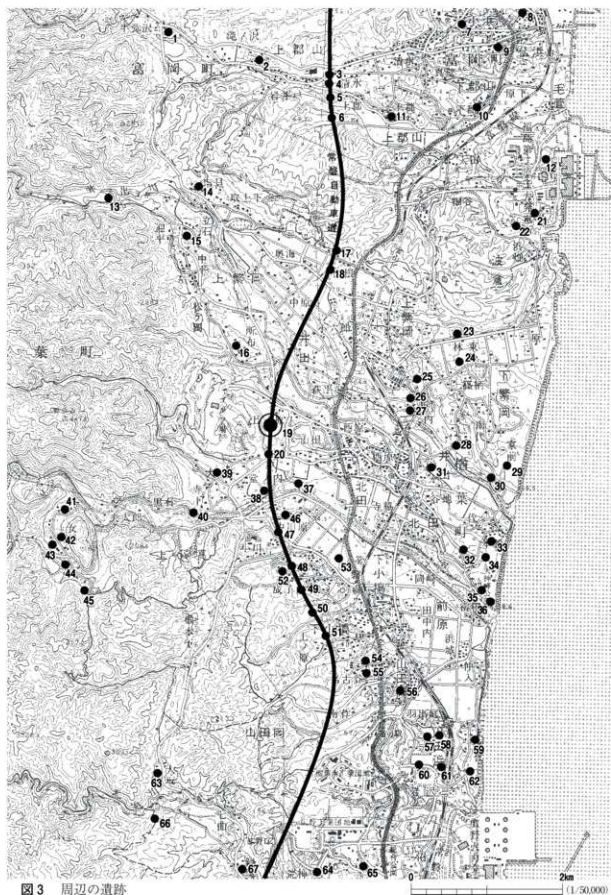


図3 周辺の遺跡

第1章 遺跡の環境と調査経過

表2 周辺の遺跡一覧

(Noは図3中の番号に一致する)

No	遺跡名	遺跡番号	所在地	種類	時期	No	遺跡名	遺跡番号	所在地	種類	時期
富岡町 543						31	井出上ノ原遺跡	0070	北田上ノ代	集落跡	縄・弥・古墳
1	千尋洋遺跡	00029	上郡山字千尋沢	敷布地	縄 文	35	天神山城跡	00660	北田上ノ原	城跡跡	中 世
2	岡の沢遺跡	00021	上郡山字岡の沢	敷布地	縄 文	36	天神原遺跡	00661	北田上ノ原	墓 塚	旧・弥
3	清水遺跡	00027	上郡山字清水	敷布地	弥・平	37	海法地遺跡	00071	大谷字海法地	敷布地	弥・平
4	岩井戸東遺跡	00029	上郡山字岩井戸	敷布地	弥・平・近	38	神田遺跡	00086	大谷字神田・宮前	敷布地	弥・平・近
5	上郡日遺跡	00060	上郡山字上郡	集落跡	縄・古墳・平	39	名合沢遺跡	00078	大谷字名合沢	城跡跡	中 世
6	御山人遺跡	00063	上郡山字御山人	集落跡	縄・平	40	大谷館跡	00017	大谷字西代	城跡跡	中 世
7	上の町入遺跡	00018	小浜字中央	敷布地	縄 文	41	北女字遺跡	00015	上小編字女平	敷布地	縄 文
8	釜田遺跡	00043	弘浜字釜田	敷布地	古墳～平	42	中女字遺跡	00018	上小編字女平	敷布地	旧・縄
9	西原日遺跡	00024	弘浜字西原	敷布地	縄 文	43	中倉遺跡	00019	上小編字中倉	敷布地	縄 文
10	真壁跡	00030	下郡山字真壁	城跡跡	中 世	44	南女字遺跡	00020	上小編字女平	敷布地	縄 文
11	一本松遺跡	00032	上郡山字前川	敷布地	縄 文	45	赤無遺跡	00021	上小編字中平	敷布地	縄 文
12	毛栗遺跡	00031	毛栗字前川原	敷布地	縄文～古墳	46	中川原遺跡	00085	大谷字中川原	敷布地	弥・平・近
横貫町 542						47	小山日遺跡	00084	上小編字小山・地蔵堂	集落跡	弥・平・中
13	田山遺跡	00005	井出字田山	敷布地	縄 文	48	高橋前遺跡	00024	上小編字馬場前・楨内・宮前	集落跡	縄・弥・近
14	塩貝遺跡	00004	上郡岡字塩貝	敷布地	旧・縄・古墳～平	49	鍛冶屋遺跡	00026	上小編字鍛冶屋・根ノ子原	集落跡	縄・弥・近
15	立石遺跡	00008	井出字立石	敷布地	縄 文	50	小編城跡	00027	下小編字正明寺	城跡跡	中 世
16	所布遺跡	00010	井出字所布	敷布地	縄 文	51	下小編上ノ原遺跡	00030	下小編字上ノ原	集落跡	弥・弥・平
17	上郡岡山根遺跡	00003	上郡岡字山根	集落跡	縄・弥・平・近	52	本ノ八幡神社遺跡	00088	上小編字宮原・宮平	集落跡	縄・弥・平
18	二枚橋遺跡	00108	上郡岡字二枚橋	敷布地	縄・平・近	53	宮田遺跡	00022	上小編字宮田	敷布地	弥・平
19	大谷上ノ原	00069	大谷字上ノ原・山根	集落跡	旧・縄・弥・弥・平	54	仏壇遺跡	00073	山田岡字仏壇	敷布地	弥・平
20	大谷山根遺跡	00092	大谷字山根・堤下	集落跡	平・近	55	宮ノ遺跡	00035	山田岡字宮下	敷布地	弥・弥・平
21	北向遺跡	00046	西谷字北向	集落跡	旧・縄・古墳～平	56	古駅遺跡	00077	山田岡字古駅	敷布地	弥・平
22	北向横六墓群	00045	西谷字北向	古 墳	古 墳	57	熊鷹城跡	00066	山田岡字熊・小編・根出坂	城跡跡	中 世
23	原遺跡	00072	西谷字原	敷布地	弥・平	58	根ノ山遺跡	00067	山田岡字原	敷布地	縄 文
24	原林遺跡	00047	下郡岡字林東	敷布地	旧・縄	59	代東遺跡	00069	山田岡字代東	敷布地	縄 文
25	伊光東遺跡	00049	井出字伊光東	敷布地	縄 文	60	根ノ子原入遺跡	00096	山田岡字根ノ子原	集落跡	平 安
26	伊光西遺跡	00048	井出字伊光西	敷布地	縄・古墳～平	61	美ノ森八ノ日遺跡	00094/ 00066	山田岡字美ノ森	集落跡	弥・平・縄・弥・平
27	内ノ内遺跡	00052	井出字内ノ内	敷布地	縄・平	62	御神山遺跡	00080	山田岡字上ノ代	敷布地	弥・平
28	赤松遺跡	00079	下郡岡字赤松・井出字 根ノ沢	集落跡	縄・弥・平	63	大坂遺跡	00065	山田岡字大坂	敷布地	縄 文
29	柳松遺跡	00082	下郡岡字柳松	集落跡	弥・弥・平	広野町 541					
30	小田林北遺跡	00100	下郡岡字小田林	敷布地	弥・平	64	堂ノ原遺跡	00059	上北郷字堂ノ原	敷布地	古墳～平安
31	高橋遺跡	00055	井出字高橋	敷布地	縄 文	65	二ノ沼西遺跡	00050	上北郷字二ノ沼	敷布地	縄 文
32	北門上遺跡	00059	井出字上ノ原	敷布地	縄 文	66	新森遺跡	00001	上北郷字新森	敷布地	旧・縄
33	代遺跡	00058	井出字代	集落跡	縄 文	67	御坂遺跡	00091	上北郷字御坂	敷布地	弥・平・近

時期：旧=旧石器，縄=縄文，弥=弥生，弥=弥生，奈=奈良，平=平安，中=中世，近=近世

上小高の馬場前遺跡・鍛冶屋遺跡・小山B遺跡などである。多くは平安時代の初め、9世紀代を中心とする集落である。また、山田浜にはかつて条里制遺構が残されることが航空写真により確認でき、古駅遺跡を『統日本紀』に記載された石城国駅家と関連させた見解もある(鈴木1991)。

中世の植葉町周辺は、岩城氏と相馬氏との勢力境にあたり、中世を通じて攻防の要所であったようである。城館跡は木戸川を境にして南北に認められ、南側には植葉城跡・小高城跡・上ノ原城跡・小山城跡、北側には大谷館跡・名合沢館跡・天神山城跡・井出城跡・糞輪城跡がそれぞれ残っている。多くの城館跡は、町史編纂事業に併せて縄張り測量調査が行われている。

近世以降は当初磐城平藩の支配となるが、その後はめまぐるしく支配者が変遷し、延享4(1747)年以降は幕領となり、代官支配を経て幕末を迎える。この時期の遺構としては、井出の一里塚が現存し、木戸宿には臨本陣の一部が保存されている。また、製鉄遺跡が約20カ所存在し、その他に製塩・窯業が行われていたことが確認されている。(大波)

第2章 遺跡の位置と調査経過

第1節 位置と地形

大谷上ノ原遺跡は、橋葉町大谷字上ノ原・山根地内に所在する。遺跡はJR常磐線竜田駅から西へ約2km、同木戸駅から北西に約4kmの地点に位置し、海岸線から3kmほど内陸となる。遺跡のすぐ東側には県道35号線、東方約1kmには国道6号線が平行して南北方向に通っている。

遺跡周辺の地形は、本県浜通り地方に特有な阿武隈高地東縁の段丘地形となる。それぞれの段丘地は、阿武隈高地から太平洋へと東流する河川とその支流によって形成され、開折された谷状地形に挟まれながら海岸へと延びている。地質的には、遺跡は中位Ⅱ面という仙台層群大年寺層を基盤となる段丘上に立地する。この中位Ⅱ面は、遺跡の南方を東流する木戸川によって形成された平坦な河成段丘で、阿武隈高地から海岸すぐの天神岬まで続いている。

遺跡は段丘の付け根部分に広がり、東西を木戸川の支流によって挟まれた舌状台地にある。舌状台地西側に接する谷は深く開折され、段丘崖から急傾斜で谷まで落ち込んでいる。遺跡の標高は70～78mを測るが、南に位置する木戸川とで約65m、北に位置する井出川とで約40mの比高差がある。遺跡からは、木戸川の向こうに、同じく常磐自動車道関連で発掘調査が行われた馬場前遺跡や鍛冶屋遺跡が立地する丘陵地帯を望むことができる。

4次調査は、3次調査区東側に接する段丘平坦面1,800㎡を対象として実施した。(大波)

第2節 調査経過

大谷上ノ原遺跡の4次調査は、平成22年4月12日に開始し、5月28日に終了した。調査日数は28日である。当初調査員2名を配置し、初日から器材搬入などの調査環境の整備を行いつつ、4月13日より重機による表土除去作業を開始した。4月16日にはプレハブ・仮設トイレの設置が完了し、翌週の4月19日から作業員22名を雇用して人力による発掘調査を行った。調査当初は季節外れの降雪があるなど低温が続く、調査終盤には梅雨入り前にも関わらず雨天日が多く、天候に恵まれず短期間の調査にはやや支障をきたした。

調査区は進行中の常磐自動車道建設の工事現場内に設けられており、調査中の安全確保を第一優先として、工事担当の東洋建設側と連絡を取りつつ安全策を講じながらの調査となった。大谷パーク予定地の工区内では急ピッチに掘削作業が行われており、その廃土を運ぶ何台もの大型ダンプカーが引切りなしに作動している状況であった。そのため調査時には、工区内であっても調査区外への出入りは極力控え、調査区には工区用とは別の専用ゲートを設置して通勤時間を制限するなどの処置をとりながら作業を進めた。

表土除去作業時より木炭焼成土坑とみられる遺構数基が確認できたが、先行引き渡し部分の調査区北西端と南側部分を優先して調査を行った。4月23日には工区内の搬入道路にかかる北西端の一部引き渡しが予定されていたため、作業員を二手に分けて検出作業を行い、必要箇所に測量杭の打設を行った。北西端部分からは遺構は認められなかったが、調査区南側からは縄文時代の落し穴遺構を含む数基の土坑を検出した。

大型連休明け後、調査区南側の調査が本格化し、遺構の精査・記録を行うとともに調査区全体の地形測量を完了し、5月17日には調査区南側の引き渡しを実施した。遺構、遺物とも調査区南半部分に集中しているが、この範囲には風倒木痕も多く、掘り込み作業に人力を割くこととなった。引き渡した残りの調査区内からは木炭焼成土坑数基を検出し、精査・記録を行った。

調査の最終週には調査区全体の空中撮影を実施したが、雨天続きで調査区内の清掃作業の時間が取れず調査最終日まで持ち越すこととなった。5月28日には空中撮影を終了し、その後に基本土層と旧石器時代の遺物包含層を確認するためトレンチを設定し記録を行ったが、旧石器時代の遺物は確認できなかった。また、作業員の雇用も同日で終了した。

週明けの5月31日には、東日本高速道路東北支社いわき工事事務所関係者・県教育庁文化財課・当事業団遺跡調査部との3者による最終確認を行い、現状のまま引き渡した。同週のうちに賃貸物件の返却、器材の搬出などを行って現地での調査を完了した。(大 波)

第3節 調査方法

大谷上ノ原遺跡では、常磐自動車道建設に伴い今回の調査を含めて計4回の発掘調査が行われている。一連の調査では、平成11年度の1次調査で設定した調査用のグリッドを踏襲しており、今回の4次調査でも前例に倣っている。近年の調査では測量座標系は新測地系を用いているが、過年度調査と整合性を取るため、本年度調査でも旧測地系を採用している。

グリッドは $X = 143,400$ ・ $Y = 102,000$ を原点として、路線工事区内の要保存範囲を覆うように設定される。一辺を10mとした正方形を1グリッドとしており、グリッドは原点から東に向かってアルファベットの大きくてA・B・C…Z、南に向かって算用数字で1・2・3…と付けている。各グリッドの呼称は、それぞれに付けられた東西のアルファベット、南北の算用数字の順に、「S30」「V37」などと呼んだ。報告書中での遺構の位置は、それら1グリッドを100分割した1m単位のトンボを基本に、原点からの距離で南へ350m、東へ200mであれば「S350」「E200」と表記している。遺構によっては50cm単位のトンボを用いており、その際は「S350.5」と表記する。

調査区域は、調査前に調査範囲を示す杭が設定されていた。4次調査については $X = 143,010 \sim 143,170$ つまりS390～S230、 $Y = 102,160 \sim 102,220$ つまりE160～E220の範囲に収まっている。

土層は、過年度の基本層序を用い、調査区内にトレンチを設定して確認した。基本土層名はローマ数字を使用し、アルファベットのLとの組み合わせで「LVI」などと表記した。遺構内堆積土に

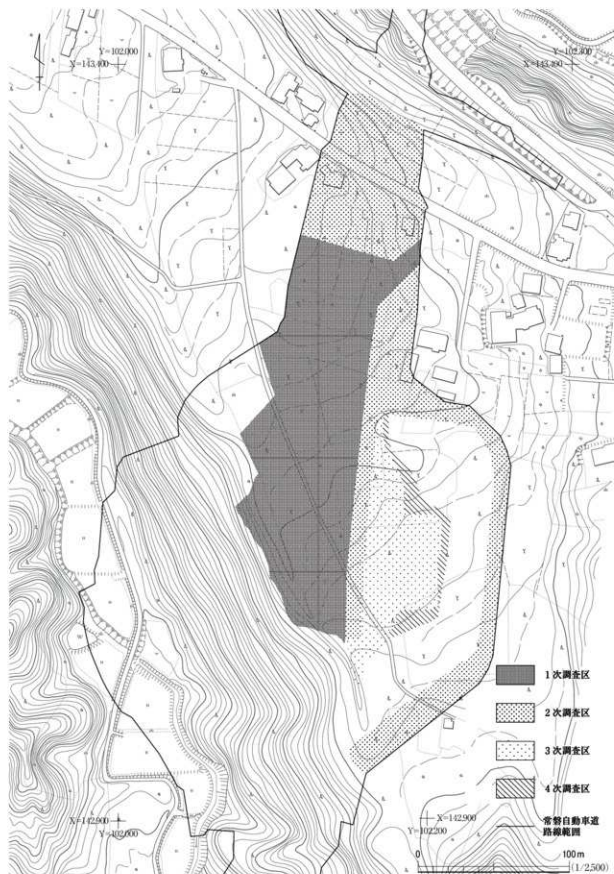


図4 調査区位置図

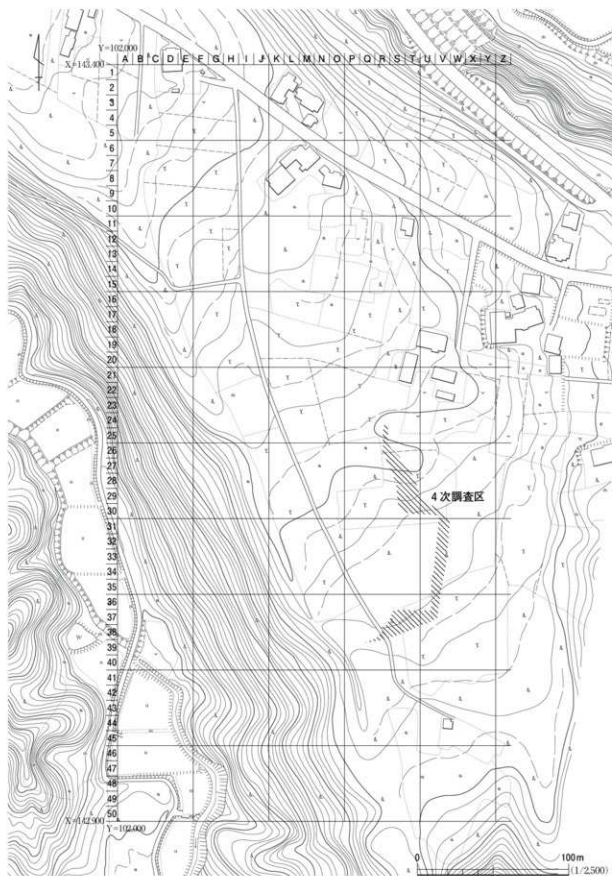


図5 グリッド配置図

については算用数字を使用し、基本層序と区別するための小文字ℓとの組み合わせで「ℓ5」などと表記している。

実際の調査は、礫を多く含んだ盛土と旧表土を重機で除去し、その後に人力による遺物の検出、精査を行った。遺構は、光波トランシットで測点して位置を特定後、簡易遺方測量で個点し、線を結んで図化した。遺物は、遺構およびグリッドごとに土層を付記して取り上げた。

調査の記録は、原則として縮尺1/20で作図し、各図に必要な事項を明記している。調査区の地形は縮尺1/200で50cm単位の等高線を図示し、標高値を算入して等高線図を作成した。また、写真の撮影は、35mmのカラーリバーサル、白黒フィルム用カメラおよびデジタルカメラを用い、同一カット数で遺構の確認面、土層の堆積状況、完掘状態を基本とし、その他必要に応じて撮影を行った。

発掘調査で得られた出土遺物および諸記録は、財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部において、現地調査終了後に屋内整理作業を実施した。それらの結果は、報告書として刊行し、その後に、所定の様式に従い各種の台帳を整理し、福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。

(大 波)

第3章 遺構と遺物

第1節 調査の概要と基本土層

遺構と遺物の概要 (図6, 写真3)

大谷上ノ原遺跡の4次調査は、大谷パーキングエリア建設予定地の拡張に伴い、前回の3次調査が行われた調査区7,000㎡に接する1,800㎡を対象として行った。3次調査区の形は中央部が東に飛び出した「凸」字状の形を呈しているが、4次調査区は、ちょうど3次調査区の東側部分を覆うように南北に細長い「」字状を呈している。

今回の4次調査で検出した遺構は、落し穴2基、木炭焼成土坑3基を含む土坑6基である。それらは調査区南半部分から検出しており、調査区を接する2・3次調査の成果と照らしてもやや遺構密度の高くなる等高線72.0～73.0m前後の範囲内に収まっている。さらに4次調査区を「」字の北辺部分を調査区北側、東辺部分を調査区東側、南辺部分を調査区南側と設定すれば、調査区東側から木炭焼成土坑、調査区南側から落し穴の遺構を検出しており、それらの分布状況についても他年度の調査成果と矛盾していない。なお、3次調査と同様、1・2次調査で報告される旧石器時代のブロックなどは確認できなかった。

出土遺物は、縄文土器8点、石器類6点と極めて少ないが石器類の中には旧石器時代終末期に比定できる資料を含んでおり、今回の調査において特筆されるべきものである。

基本土層 (図7, 写真4)

本遺跡はおよそ南北に延びる舌状台地上に位置し、3・4次調査区はその平坦部分にあたり、4次調査区内はほぼ平坦であるが、北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。4次調査区での最大標高差は、北西端と南東端で約25mを測る。そこで4次調査では、調査区のはほぼ中央となるV32グリッド付近に土層観察地点を設定し、過年度の基本土層の層序を用いて、盛土の下層から4次調査での遺構検出面となるLVIまでを4層に分層した。各層の所見は下記の通りである。

L I : 黒色砂質土 10YR2/1 粘性・しまりともがない。本遺跡全体を覆う表土層と考えられるが、調査区内ではその上位に凝灰岩を多く含む盛土が厚く堆積し、調査区内の一部では盛土下にほとんど認められないこともあった。

L III : 褐色砂質土 7.5YR4/4 やや粘性・しまりがあり、炭化物粒を少量含む。3次調査区内では窪地や台地の落ち際などの他より低い部分に若干残る程度であり、本調査区内でも他の地点ではほとんど認められない。過年度調査では上部から沼沢第一テフラが確認され、縄文時代の遺構検出面と報告される。本調査では、遺構検出に際してLVIまで掘り下げて確認を行ったが、検

出した縄文時代の遺構内には基本的に本層が堆積している。

L V：褐色粘土 10YR4/6

やや粘性・しまりあり。過年度調査では始良T n火山灰(AT)が含まれる旧石器時代の石器の包含層と報告されるが、本調査区内ではL VIとの識別が判然としない場合も多く、L V中から旧石器時代の資料は確認できなかった。

L VI：褐色粘土 10YR4/4

粘性・しまり強い。3・4次調査区内では表土直下から確認できることが多く、今回の調査での遺構検出面となる。また、遺構精査時にL VI下層が礫層となることを確認でき、過年度報告でのL VIIに比定されるものとする。

以上のように、本調査での基本土層は、過年度調査で確認できた堆積状況とは必ずしも一致していない。調査区内全体に凝灰岩を多く含んだ黄褐色土の盛土が厚く堆積しており、場所によっては盛土直下に遺構検出面となるL VIが認められる。このことから、旧地形が大きく改変を受けていることが理解できる。先述したように4次調査では検出遺構、出土遺物とも希少であり、検出した土坑の遺存状

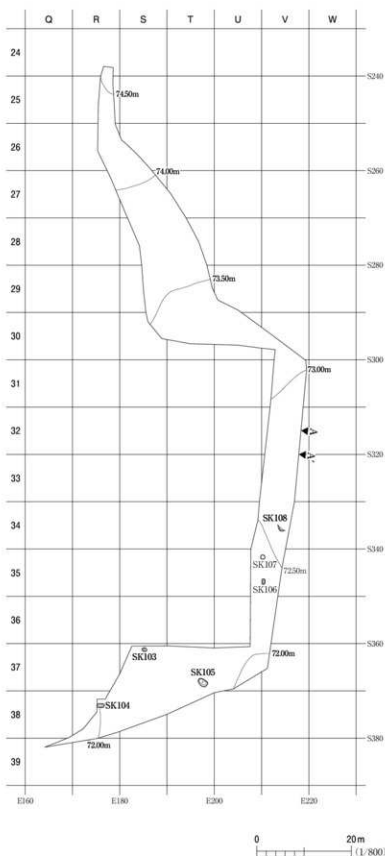


図6 4次調査区遺構配置図

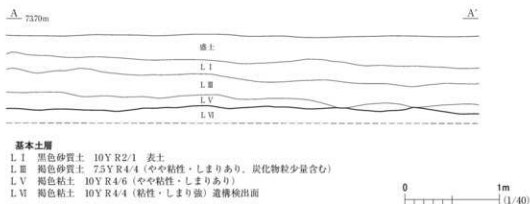


図7 基本土層

態は悪く、周壁がほとんど残らないものも認められる。過年度調査でも不安定な土壌の堆積状況が指摘されているが、少なくとも4次調査区では後世の土地利用において人為的に現況の平坦な地形へと整備されたものと考えられ、地点ごとに層序の差異が認められるのであろう。(大波)

第2節 土 坑

本調査で検出した遺構は土坑6基で、そのうちの2基が縄文時代の落し穴、3基が古代の木炭焼成土坑、1基が性格不明のものである。

2基の落し穴は調査区南側から検出しており、所属時期は特定できないものの過年度調査では同様のものを多数検出している。それらは舌状に延びる丘陵地の尾根上に形成されており、本調査で検出した2基はそのうちの末端に位置づけられる。

また、3基の木炭焼成土坑は調査区東側南半部分から検出し、遺存状態は悪いものの、同規模、同軸のものである。3基の土坑は、2・3次調査区間を充填するように丘陵地南東側の緩斜面上に掘り込まれている。それら木炭焼成土坑群の時期の詳細については判断できないが、その西方が過年度に調査が行われた平安時代の堅穴住居跡を含む古代の集落推定地となるため、土坑群は集落と同時期の所産と考えられる。

103号土坑 SK 103 (図8、写真5・10)

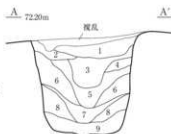
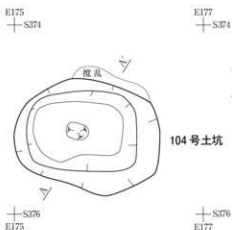
本遺構は、調査区南側のS 37グリッドに位置する。L VI上面より検出したが、すぐ南側には約5m四方の後世の掘削痕があり、本遺構の上方部分も大きく乱れている。遺構内堆積土は3層に分層でき、ℓ 1は本遺構の上方部分全体を覆っていた後世の攪乱層と考えられ、ℓ 3が壁際に三角堆積する自然堆積である。規模は、攪乱層を取り除いた残存部分で長軸90cm、短軸80cm、深さ30cmを測る。平面形は歪んだ円形ないし隅丸方形である。底面はほぼ平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。この地点では盛土直下がL VIとなり、上方部分が攪乱を受けていることから、旧形状では深さがある程度見込まれる。

第3章 遺構と遺物



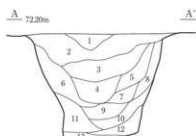
103号土坑堆積土

- 1 褐色土 7.5 Y R 4/4 (明褐色粘質土・炭化物を微量含む)
- 2 暗褐色土 7.5 Y R 3/4 (明褐色粘質土を多量・炭化物を微量含む)
- 3 黒褐色土 7.5 Y R 3/2 (明褐色粘質土を多量含む)



104号土坑堆積土

- 1 暗オリーブ褐色粘質土 2.5 Y 3/3 (黄褐色土を多量含む)
- 2 オリーブ褐色粘質土 2.5 Y 4/4 (暗褐色土を少量含む)
- 3 黒褐色粘質土 2.5 Y 3/2 (黄褐色土を微量含む)
- 4 褐色粘質土 10 Y R 4/4
- 5 暗褐色粘質土 10 Y R 3/4 (黄褐色土を多量含む)
- 6 にぶい黄褐色粘質土 10 Y R 5/4 (暗褐色土を少量・炭化物を微量含む)
- 7 黒褐色粘質土 10 Y R 3/1 (黄褐色土・炭化物を微量含む)
- 8 黄褐色粘質土 10 Y R 5/8 (暗褐色土を多量含む)
- 9 黒褐色粘質土 10 Y R 3/1 (黄褐色土を少量含む)



105号土坑堆積土

- 1 黒褐色土 10 Y R 2/2 (炭化物を少量含む)
- 2 暗褐色土 10 Y R 3/3 (炭化物を少量含む)
- 3 黒褐色土 10 Y R 3/2 (炭化物を少量含む)
- 4 黒褐色土 10 Y R 3/2 (にぶい黄褐色粘質土を多量含む)
- 5 にぶい黄褐色土 10 Y R 4/3
- 6 にぶい黄褐色土 10 Y R 4/3 (黄褐色粘質土を多量含む)
- 7 灰黄褐色土 10 Y R 4/2
- 8 灰黄褐色土 10 Y R 5/2
- 9 黒褐色土 10 Y R 2/3 (黄褐色粘質土を少量含む)
- 10 にぶい黄褐色土 10 Y R 4/3
- 11 暗褐色土 10 Y R 3/3 (にぶい黄褐色土を多量・炭化物を少量含む)
- 12 黒褐色土 10 Y R 2/2 (炭化物を少量含む)
- 13 にぶい灰黄褐色粘質土 10 Y R 5/4
- 14 褐色土 10 Y R 4/6 (炭化物を少量含む)

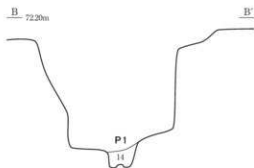


図8 103～105号土坑

出土遺物は確認できず、本遺構の性格や時期は不明である。(大 波)

104号土坑 SK 104 (図8・10, 写真5・7・11)

本遺構は調査区南側のR38グリッドに位置し、遺構検出面はLVI上面である。形状から縄文時代の落し穴と考えられる遺構で、東方約20mには同様の105号土坑が存在する。

遺構内堆積土は9層に細分した。ℓ9の黒褐色粘質土が底面全体を覆い、その後には地山のローム層とみられる黄褐色粘質土と黒褐色土が交互に堆積し、自然埋没の様相が観察できる。また、ℓ3中には木の根が入り込んでおり、ℓ3より上位は攪乱が著しい。

本遺構は、上端には周壁崩落に伴って乱れるものの、平面形は東西に長い隅丸長方形を呈す。規模は、上端で長辺約160cm、短辺約120cm、形状の整っている中端で長辺117cm、短辺84cmを測り、遺構検出面からは最深約110cmである。底面は礫層に達し、礫面が露呈するもののほぼ平坦で、中央部分が浅くぼんでいる。周壁は、底面近くが緩やかではあるが、ほぼ垂直に立ち上がっている。

検出面より剥片2点が出土したが、本遺構の上方は攪乱を受けており関係については判断できない。なお、詳細については別節の出土遺物にまとめて記載する。

本遺構は、規模や形状から過年度調査で報告されるものと同様の縄文時代の落し穴と考えられるが、時期の詳細については不明である。(大 波)

105号土坑 SK 105 (図8, 写真5・8)

本遺構は調査区南側のT37グリッドに位置し、遺構検出面はLVI上面である。形状から縄文時代の落し穴と考えられる遺構で、西方約20mには同様の104号土坑が存在する。

遺構内堆積土は14層に細分したが、ℓ4～13は黒褐色土と地山ローム層が主体となる黄褐色土が交互に堆積する自然堆積土で、周壁の崩落土を含んでいる。その後、ある程度埋没して窪地となった段階で、周囲から黒褐色土が流入したと推測している。

本遺構の西隣には大きな風倒木痕があり、特に上端南側では攪乱を受けている。そのため形状がやや乱れるものの、上端部での平面形は北西-南東方向に細長い楕円形を呈し、長軸約200cm、短軸約140cm、底面から検出面までの深さは約110cmである。ただし、形状は底面に近づくと隅丸長方形を呈しており、周壁が大きく崩落した可能性も考えられる。底面近くから礫層を掘り込んでおり、礫層への移行部分にあたる中端では長辺約120cm、短辺約90cmの隅丸長方形を呈している。周壁は底面から約30cmを測る中端までが垂直に立ち上がるが、そこから開口部に向かって傾斜が緩やかになる。底面はほぼ平坦であるが、礫層を掘り込んでいるため礫面が露呈する。また、底面のほぼ中央には直径約30cm、深さ約20cmのピットが確認でき、ピットの底面中央には礫が掘り残される。

本遺構から出土遺物は確認できず、時期の詳細については不明である。用途は、規模や形状から過年度調査で報告された遺構と同様の縄文時代の落し穴と考えられる。(大 波)

106号土坑 SK106 (図9, 写真6, 9)

本遺構は調査区東側のV35グリッドに位置し、LVI上面で検出した。周囲からは本遺構を含めて3基の木炭焼成土坑を検出し、3基は長軸をほぼ真北方向とした同規模のものとみられる。

遺構内堆積土は2層に分層でき、どちらも炭化物を多量に含んだ黒褐色土である。遺存状況が悪いが、ℓ2が壁際に三角堆積する。また、ℓ2の壁際には熱変化した周壁の残存部分とみられる焼土塊が混入する。

本遺構は底面近くしか遺存していないが、平面形は長辺約130cm、短辺約90cmの歪んだ隅丸長方

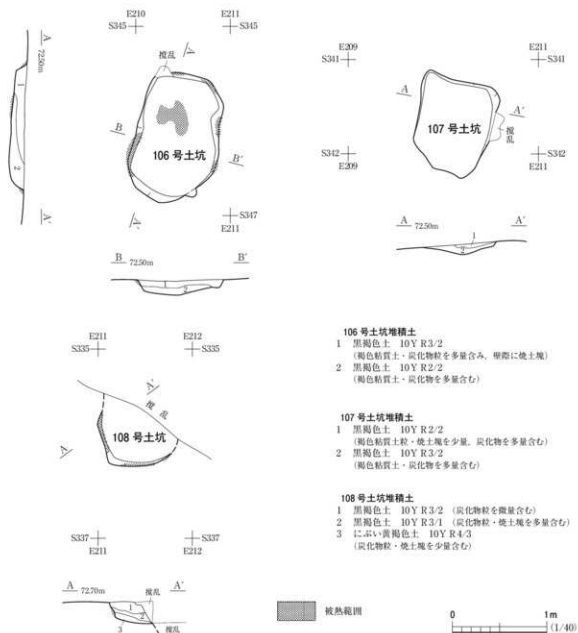


図9 106～108号土坑

形で、底面から検出面までの深さは残りのよい部分で約20cmを測る。底面はやや凹凸が認められ、中央が皿状にわずかにくぼみ、周壁は緩やかに立ち上がる。また、周壁の一部は被熱により焼土化している。

本遺構は、形状から木炭焼成土坑と考えられるが、出土遺物は認められず時期の詳細については不明である。過年度調査では同丘陵上から平安時代の竪穴住居跡を検出しており、ほぼ同時期の所産と考えられる。(大 波)

107号土坑 SK 107 (図9, 写真6・10)

本遺構は調査区東側のV35グリッドに位置し、LVI上面で検出した。本遺構は底面部分しか遺存せず、南側の1/3は残っていない。諸特徴から木炭焼成土坑と考えられ、周囲には同様の遺構である106号土坑、108号土坑が存在する。

遺構内堆積土は2層に分層でき、どちらも炭化物を含んだ黒褐色土である。遺存状況が悪く南側の壁の立ち上がりは確認できないが、遺存する北壁から短辺は約90cmを測り、106号土坑と同規模のものと考えられる。底面は凹凸があり、遺存する部分の周壁は垂直な立ち上がりが認められる。

本遺構は、形状から木炭焼成土坑と考えられる。出土遺物は認められず時期の詳細については不明である。過年度調査では同丘陵上から平安時代の竪穴住居跡を検出することから、ほぼ同時期の所産と考えられる。(大 波)

108号土坑 SK 108 (図9, 写真6・10)

本遺構は調査区東側のV34グリッドに位置し、LVI上面で検出した。本遺構は風倒木痕によって大きく攪乱を受けている。南西隅の一部しか遺存しないものの、諸特徴から106・107号土坑と同様の木炭焼成土坑と考えられる。

遺構内堆積土は3層に分層できた。どれも炭化物の粒子を含んでおり、 $\ell 2 \cdot 3$ には焼土塊が認められる。南西隅の一部分しか確認できなかったが、106・107号土坑と同規模になるものと考えられる。底面は中央がくぼんだ皿状となり、周壁は緩やかに立ち上がる。周壁の一部には被熱で焼土化した状況も認められる。

本遺構は、形状から木炭焼成土坑とみられるが、出土遺物は認められず時期の詳細については不明である。過年度調査では同丘陵上から平安時代の竪穴住居跡を検出しており、ほぼ同時期の所産と考えられる。(大 波)

第3節 出土遺物

4次調査で出土した遺物は104号土坑から出土した石器1点を含め、縄文土器片8点・石器類5点の計14点である。検出した遺構が落し穴や木炭焼成土坑といった狩猟や製炭に関わる遺構ということもあり、過年度調査と比較しても極めて限定的なものである。このことは、検出遺構の遺存状況などからも、ある時期に調査区が深く削平され、本来含まれていた遺物が失われたものと考えられる。

出土地点はほとんどが調査区南側であり、S37・38グリッド付近に集中する。ただし、この付近は複数の風倒木痕が残り、擾乱を受けて基本土層の層序が大きく乱れることから、出土遺物の位置関係は原位置を止めてはいない。

旧石器時代の石器（図10、写真11）

4次調査で出土した石器は104号土坑出土の2点、遺構外出土の3点の計5点である。出土点数が少ないため、ここにまとめて扱うこととする。時代区分は、石器の形態、風化度から推察すると、旧石器時代の遺物の可能性が高い。ただ、特に遺構外から出土した3点の資料は後世の擾乱により、大きく原位置を遊離したと考えられる場所から出土したため、出土層位を明確にすることができなかった。以下、石器の形態的特徴を述べる。

1は黒曜岩製の小形剥片である。縦に縞状の流理構造が観察されるが、肉眼では大きな斑晶は少ない。器面はやや風化し、灰白色を呈する。背面に円礫面を残す。上部端には剥離痕があり調整のように見えるが、これは剥片作出前の段階に剥離されたものとする。打面は単剥離面打面で、ポジティブ面の可能性がある。末端部分は欠損している。器面の風化の進行度から旧石器時代の遺物の可能性がある。

2は流紋岩製の小形剥片である。石材に斑晶を多く含んでいる。器面は風化が進み、灰黄色を帯びる。背面下部に剥離痕が確認できるが、二次加工ではない。背面中央と打面部は、剥離と同時に欠損したものと推察される。

3は珪質頁岩製の小形ナイフ形石器である。器面は風化により、くすんだ灰白色を呈する。打面は平坦打面で、剥片剥離時の打撃による衝撃痕をとどめる。剥片の剥離角は100°で、バルブはそれほど発達していない。背面両側縁下半部に細かなブランディングによる基部加工が施されている。背面下部の剥離痕は二次加工ではなく、石核調整時の頭部調整と考えられる。刃縁にあたる背面右側縁と上側縁には、微細剥離が観察される。

4は茶褐色の珪質頁岩製の削器である。縦長剥片を素材とし、打面は調整打面である。打撃点は2カ所に分かれている。中央の打撃点で計測した剥離角は、105°を測る。背面左側縁には浅い角度（40～45°）で入念に調整剥離が施され、直線的な刃部が形成されている。背面右側縁下端にも調整

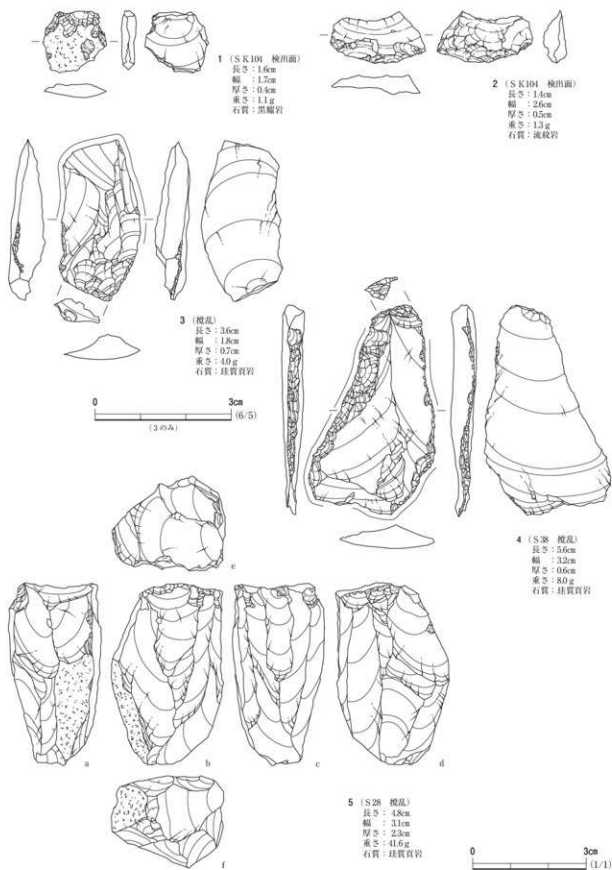


図10 104号土坑・遺構外出土の旧石器

剥離痕が観察されるが、左側縁よりもやや急斜な調整である。背面右側縁上半と背面末端には、微細剥離痕が観察される。背面右側縁下部の稜線には磨耗痕が観察できる。

5は、珪質頁岩製の細石刃核である。油脂光沢のある緻密な石質の頁岩で、風化した器面は灰白色を呈する。d面下端の欠損面での観察によれば、本来の石の色調はオリーブ褐色を呈するものと推定される。また、a面には平滑な礫面をとどめている。礫面の形状から河原礫素材と推察される。

本資料は図のe面を打面とし、主にb・c・d面を石核作業面とする。残存する打面はe面の1面だけである。ただ、作業面の剥離構成から考えると、石核調整時はf面側にも打面が設置された可能性が高い。また、作業面の剥離痕はすべてネガティブ面で構成され、ブランクが剥片素材であったかどうかは判断できない。

細石刃の剥離は、基本的にはd面側からc面さらにはb面へと進行したと考えられる。d面右半部の剥離痕は石核調整時の剥離痕と考えられ、e面の打面よりも古い(a面参照)。

d面では右から左に細石刃の剥離が行われた後、c面も基本的には右から左に剥離が進行している。ただ、最も新しい剥離は、c面中央の剥離である。さらに、b面に作業面が転移した後も、右から左に細石刃が剥離されている。石核調整は作業面上端の打面縁に細かな調整が観察されるが、打面に対する調整は行われていない。また、打面に擦痕などの調整もない。

縄文土器 (図11, 写真12)

図11-1~7は縄文土器の胴部片で、沈線文の特徴から田戸下層式に比定される早期中葉の資料である。どれも細片ではあるが、1~5は細い沈線で、6・7は太めの沈線で直線的に施された数条の施文が認められる。また、1には沈線文に平行して貝殻腹縁文が認められる。8は無文の底部片で、時期の詳細は不明である。 (大波)

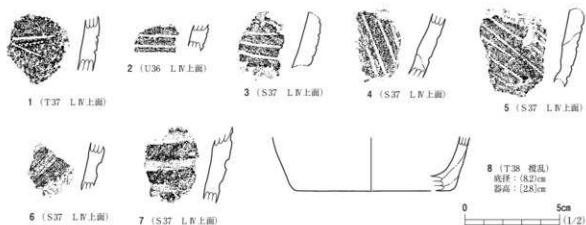


図11 遺構外出土土器

第4章 ま と め

大谷上ノ原遺跡は、本県浜通り地方に特有の河岸段丘に立地し、遺跡の南方に東流する木戸川の支流によって東西を挟まれた舌状台地上に広がる。本遺跡では常磐自動車道の建設に伴い、今回の4次調査1,800㎡を含み、平成11年度の1次調査13,000㎡、続く平成12年度の2次調査10,600㎡、平成20年度の3次調査7,000㎡を合わせた計32,400㎡の発掘調査が行われた。その結果、当該地域を代表する旧石器時代の石器類をはじめ、縄文時代、平安時代の遺構・遺物を確認することができ、それらを主体とする複合遺跡であることが判明した。

本報告の4次調査でも、過年度の調査成果と同様に縄文時代と平安時代の遺構を検出し、わずかながら旧石器時代、縄文時代の遺物を出土している。本章では、本報告のまとめとして4次調査の成果を織り込みつつ、これまでの調査成果について概観する。

旧石器時代

本遺跡が立地する中位Ⅱ段丘上には旧石器時代の遺跡が確認されており、周辺には橋葉町鍛冶屋遺跡、小鳩城跡、天神原遺跡、富岡町上繁岡D遺跡などを挙げるができる。本遺跡は、それらの中でも旧石器時代の資料が質・量とも他の遺跡を卓越しており、本県浜通り地方を代表する旧石器時代の遺跡といえる。

本遺跡の1・2次調査区からは遺物の集中ブロック5カ所と礫群1基を検出した。それらブロックは舌状台地の先端部分の段丘崖付近に分布している。そのような傾向のためか、平坦部分となる3・4次調査区からは遺物のまとまりは認められなかった。

出土した石器群は、出土層位や特徴的な石器の型式学的分類から、A T降灰を境に新旧2時期に分けることができ、さらにA T降灰以後の2段階の変遷が指摘されている。A T降灰以前の石器群としては、基部加工のナイフ形石器や台形椀石器、局部磨製石斧の石器組成および剥離技術から、1次調査区の1・2号ブロックにその特徴が認められる。A T降灰以後の石器群としては、2次調査区の3・4号ブロックに関東地方での「砂川期」から「月見野期」への変遷が認められる。4号ブロックには砂川期の小板型彫刻刀に類似する特徴があり、3号ブロックには組成に尖頭器を含むため月見野期に相当するものと考えられる。

3・4次調査区でもわずかながら旧石器時代の石器類が出土するが、4次調査区からは過年度調査の資料と比較して新しい要素を持つナイフ形石器と細石刃核を確認することができた。このことは、本遺跡の旧石器時代の変遷にさらに新段階が加わる可能性を示唆しており、出土した細石刃核は本県浜通り地方において希少資料となるものである。

縄文時代

縄文時代の遺構としては、竪穴住居跡9軒と貯蔵穴や落し穴と考えられる土坑を多数検出した。竪穴住居跡の多くは前期前葉の時期のもので、1軒は中期中葉と推定される。住居跡は1・2次調査区より検出され、遺跡が立地する舌状台地東縁の平坦部分に選地しており、調査区全体では東側と南端部分に数軒のまとまりがみられる。このうち調査区東側から検出された1号住居跡は、隅丸長方形に近い楕円形プランの長軸上に坪が2基配列されるもので、長辺約7.5mの大型の住居跡である。ただし、大型住居跡としてはやや小ぶりであり柱穴の配列に規格性がないため、前期中葉に規格化する長方形大型住居の前段階のものと指摘されている。

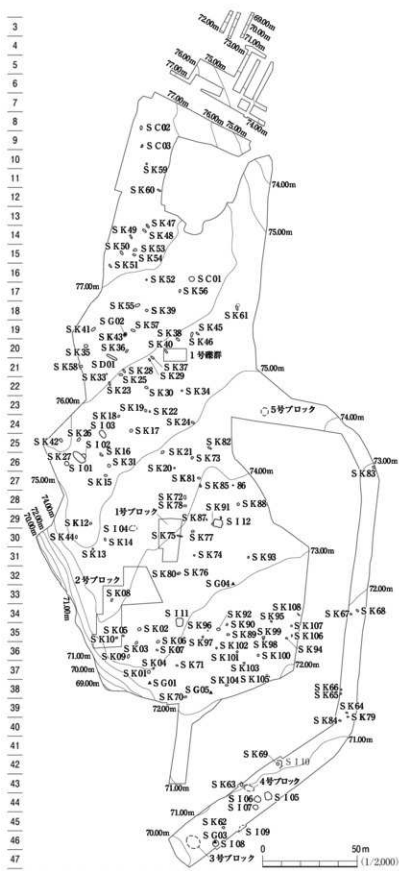
多数検出した土坑のうち落し穴と推定できるものには、大別して掘り込みが1m以上の深いものと、1m前後の相対的に浅いものとに分類することができる。4次調査区では、前者のタイプ2基を検出しており、このタイプの平面形は楕円形を基調としている。後者は平面形が隅丸長方形もしくは楕円形となり、特に調査区北側となる1・2次調査区からは等高線に沿って配列される落し穴群2列を確認している。これら落し穴は調査区全域より確認できるが、舌状台地の東西両縁辺から丘陵平坦面を通して横断する動物を対象としていた落し穴と考えられる。集落との関連性や時期差については判断材料に欠けるものの、落し穴の堆積土中に同時期の資料が認められないため後出するものとの指摘もされている。

平安時代

平安時代の遺構としては、竪穴住居跡3軒とともに複数の木炭焼成土坑を検出した。竪穴住居跡は2次調査で検出した10・11号住居跡2軒と、3次調査で検出した北カマドから東カマドへの造り替えが認められる12号住居跡1軒で、それらは平坦部分に散在している。3軒の住居跡の時期はほぼ9世紀代に収まるものとみられるが、若干の時期差が認められることから小規模な集落が継続したようである。そして、古代の製炭関連遺構と考えられる木炭焼成土坑はそれら集落に伴うものと考えられる。木炭焼成土坑は、4次調査で検出した3基を含んだ21基を検出し、11号住居跡の東方にまとまりが認められる。なお、3次調査では95号土坑出土の炭化物2点について年代測定を行ったが、集落時期とも大きく矛盾しない結果が報告されている。(大波)

引用・参考文献

- 久保和也・柳沢幸夫・吉岡敏和・高橋浩 1994「浪江及び磐城富岡地域の地質」地域地質報告 地質調査所
通商産業省工業技術院
- 鈴木管はか 1991『植葉町史 第一巻 通史 上』植葉町
- 鈴木敬治・吉田義・白瀬美智雄 1991「浪江・磐城富岡」福島県国土調査・土地分類基本調査 福島県農地林務部農地計画課
- 鈴木敬治・吉田義・白瀬美智雄 1993「井出・川前」福島県国土調査・土地分類基本調査 福島県農地林務部農地計画課
- 福島県教育委員会 1996『福島県遺跡地図 浜通り地方』
- 山内幹夫はか 2001「大谷上ノ原遺跡(1次調査)」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告26』福島県教育委員会
- 山元出はか 2002「大谷上ノ原遺跡(2次調査)」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告31』福島県教育委員会
- 佐藤管はか 2009「大谷上ノ原遺跡(3次調査)」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告56』福島県教育委員会



H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y | Z |

図12 遺構配置図

写 真 图 版



1 遺跡遠景（北西から）



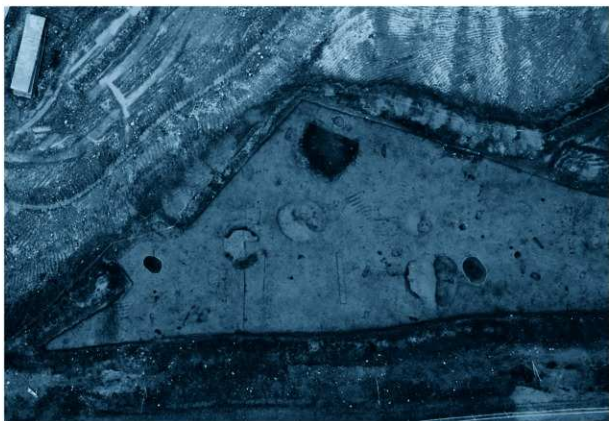
2 遺跡遠景（南から）



3 調査区全景（東から）



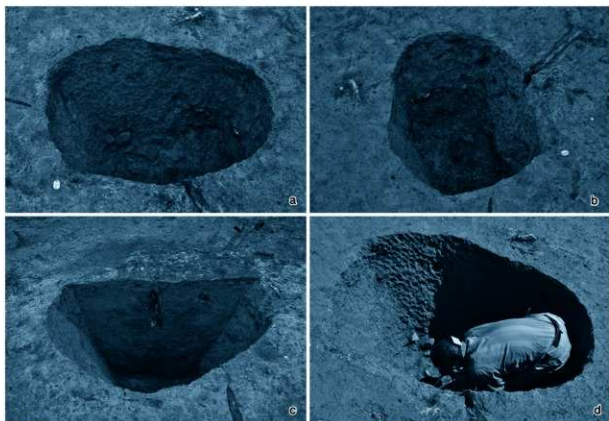
4 基本土層 V32グリッド周辺（西から）



5 調査区南側 103～105号土坑（南から）

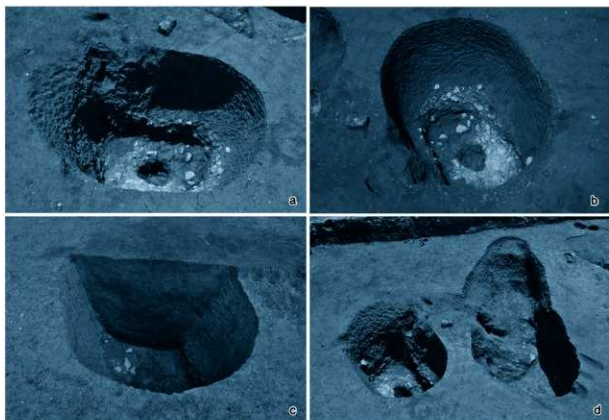


6 調査区東側 106～108号土坑（東から）



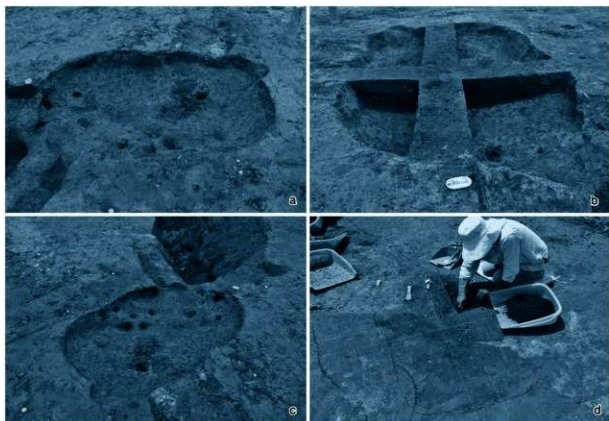
7 104号土坑

a 全景 (北から) b 全景 (南から)
c 土層断面 (南東から) d 作業風景



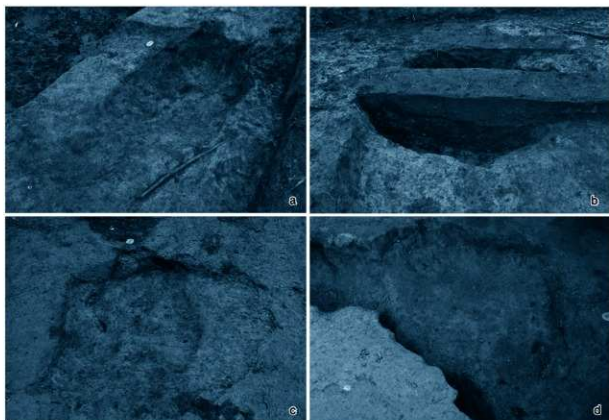
8 105号土坑

a 全景 (北東から) b 全景 (南東から)
c 土層断面 (南東から) d 完掘状況 (北東から)



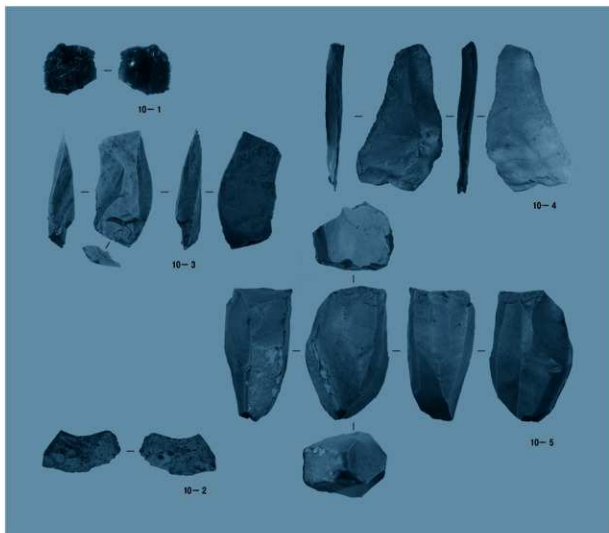
9 106号土坑

a 全景（東から） b 土層断面（南から）
c 完顔状況（北西から） d 作業風景

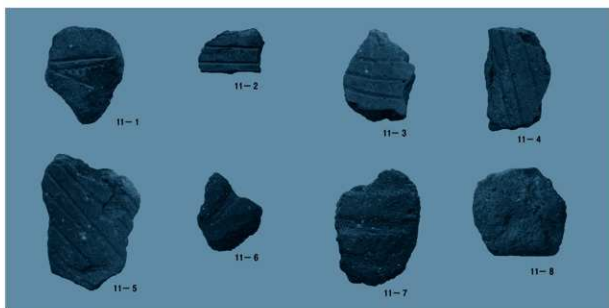


10 その他の土坑

a 103号土坑全景（東から） b 103号土坑土層断面（南から）
c 107号土坑全景（西から） d 108号土坑全景（北から）



11 出土石器



12 出土土器

報告書抄録

ふりがな	じょうばんじどうしゃどういせきしょうさほうこく65							
書名	常磐自動車道遺跡調査報告65							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第478集							
編者名	吉田秀享・大波紀子							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査課 〒960-8115 福島県福島市山下町1-25 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-521-1111							
発行年月日	2010年11月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大谷上ノ原 (4次調査)	福島県双葉郡 楢葉町大谷字 上ノ原・山根	524	00089	37° 17' 15"	140° 58' 56"	20100412～0528	1,800㎡	常磐自動車道建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
大谷上ノ原 (4次調査)	集落跡	縄文時代 平安時代	土 坑 (6)	石 器 縄文土器	今回は大谷上ノ原遺跡の4次調査となり、3次調査の東側となる丘陵平坦部の調査を行った。その結果、縄文時代の落し穴2基、平安時代の木炭焼成土坑3基を含む土坑6基を検出した。1・2次調査で注目された旧石器時代の遺構は確認できなかったが、攪乱層からではあるものの当該地域では新資料となる細石刃核が出土した。			
要 約	大谷上ノ原遺跡は、阿武隈高地東縁近くの丘陵部に立地する遺跡である。1999年・2000年に1・2次調査、2008年に3次調査、2010年に4次調査を実施し、旧石器時代・縄文時代・平安時代を主体とする複合遺跡であることが判明した。旧石器時代の石器群は、1・2次調査によってA T下位とA T上位2期の3時期の変遷が推定されていたが、4次調査で出土した細石刃核等の資料から、さらに1時期が加わる可能性が生じた。縄文時代の遺構は葬場となる落し穴とともに、大型住居跡に代表される前期前葉の集落跡を確認している。平安時代には小規模な集落が営まれており、堅穴住居跡とともに木炭焼成土坑を検出した。							

福島県文化財調査報告書第478集

常磐自動車道遺跡調査報告 65

大谷上ノ原遺跡 (4次調査)

平成 22 年 11 月 30 日 発行

編 集	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部	
発 行	福島県教育委員会	(〒960-8688) 福島市杉妻町 2-16
	財団法人福島県文化振興事業団	(〒960-8116) 福島市春日町 5-54
	東日本高速道路株式会社東北支社相馬工事事務所	(〒976-0042) 相馬市中村字塚の原65-16
印 刷	北斗印刷株式会社	(〒965-0052) 会津若松市北町大字字宇野町6-2